

開催地名：愛知県豊橋市	
開催日時	令和 5 年 2 月 25 日（土） 10：50 ～ 12：20
開催場所	ライフポートとよはし
語り部	大河内 喜男 （福島県いわき市）
参加者	豊橋市防災リーダー 67 名
開催経緯	<p>当市の自主防災組織の現状としては、若年層の減少、防災会長（自治会長）が毎年変わる校区では、防災訓練が実施しにくい状況、各校区の活動に温度差があること、校区防災会による訓練回数の減少等のウイークポイントが挙げられる。これらの解決のヒントを得るために、本講演を開催することとした。</p>
内容	<p>（１）東日本大震災当日</p> <p>私は福島県いわき市の薄磯という所に居住している。漁港として有名な小名浜港のそばで、現在は観光名所となっている塩屋崎灯台のそばにある。</p> <p>2011 年 3 月 11 日の 14 時 46 分に発生した東北地方太平洋沖地震は、いわき市では震度 6 弱を記録した。私はこの時、内陸部にある病院の待合室にいた。地震発生後いわき市沿岸部では、津波を警戒してすぐに海岸から離れるように繰り返し指示が出されていた。私の自宅は海岸の堤防のすぐ前にあり、家族が家にいると思ったため、私はとにかく家族のことが心配ですぐに車で自宅に向かってしまった。あと少しの所で道路が陥没していて立ち往生し、ようやく自宅付近にたどり着いた時には、すでに大津波が来た後だった。そのためたまたま私も、地震発生後になんとか避難所の小学校に避難していた家族も助かったが、私のような行動をとった人たちが大勢津波の犠牲になっている。</p> <p>大津波は、薄磯地区に大きな被害をもたらした。大津波は防潮堤を大きく乗り越えて集落全部を飲み込み、ほとんどの家屋を破壊した。津波の高さは 8.5 メートルに及び、住宅被害は、全壊家屋が 87 パーセントを占め、公共施設のうち唯一、集落の最も奥に位置していて避難所にもなっていた豊間小学校の校舎はかろうじて難を逃れた。薄磯地区の被害はいわき市内で最も多く、約 250 世帯、780 人の人口のうち 116 人が亡くなった。</p> <p>いわき市では過去数百年の間、大きな津波被害を受けた具体的な記録が残っていない。また、今生活している私たちにも津波被害の経験がないため、住民の間では津波に対する警戒意識がほとんどなかった。そのため、津波はここまで来ないという思い込みにより、すぐに避難する人は少数で、海を見に来ていた人が大勢津波の犠牲になってしまった。</p> <p>（２）災害に対する心構え</p> <p>身の回りで災害が起こった時、どれだけ安全な行動がとれるかが命を守れるかどうかのターニングポイントとなる。津波の場合はいち早く高いところに逃げることである。しかし、実際に災害に直面すると、多くの方はパニックとなり、どうしていいかわからなくなってしまう。家族がいれば、その安否も気になるのは当然であるが、一番大事なことは、何があっても一人一人が自分の命を守ることである。自分の命を守ること、生き抜くことが最優先され、その行動が周りの多くの命を助けることにつながる。日頃から災害に対する意識を持ち、備えをしておくことが重要である。そして、自分だけでなく、周囲の人たちに「逃げろ」と避難を促すことができる人間になることが重要だ。</p> <p>地震だけでなく、現在全国で発生している様々な災害から身を守るには、避難所はどこにあるのか、そこに行くルートはどうなっているのか、周辺に危険な箇所はないか等について、自</p>

分の目で確かめることが大切だ。是非家族と一緒に「防災まち歩き」に取り組んでいただきたい。そして、家族で災害時の行動や安否確認方法について確認しておくことも必要である。

(3) 避難所の状況

東日本大震災時には市内の各所に避難所が開設され、私の避難所生活は2か月半に及んだ。避難所生活で一番の課題はトイレの問題である。避難所によっては数百人以上の人々が、数時間の利用ではなく、数か月以上も滞在するので、足りない上に使用頻度は極めて高く、清掃や廃棄等が追い付かずすぐに使用できなくなってしまう。また、支援物資の保管場所や保管方法、そして配布方法についても避難所運営スタッフの頭を悩ませた。平常時では考えられないことだが、避難所内では支援物資の奪い合い等も実際に発生した。スムーズな避難所運営には、避難してきた人たちがいかに協力しあえるかが重要なポイントになるが、町内会や自主防災組織の役員だけでなく、住民も巻き込んで運営していくのが理想であろう。

また、避難生活が長期化するといろいろなストレスがたまる。いわき市は大部分が福島原子力発電所から30キロ圏外であり、避難を免れた一方で、原発のある県内の他の自治体から避難者を受け入れた。約5万人の人々がいわき市に避難してきたことで、市内の幹線道路の渋滞、病院・スーパーの混雑等、想定していないことが次々と起こり、住民にストレスがたまってしまった。

日常生活で地域のコミュニケーションが取れていれば、災害時でも互いに協力し合うことが可能である。自主防災組織の活動も含め、平時の時にきちんとやっておくことが必要である。みんなが少しでも生活しやすいように、地域の人たちと組織を作って互いに協力していくこと、自分たちでできることは人を頼らずに対応していくことが必要だろう。



開催地より

東日本大震災の被災体験談と自主防災組織の役割、期待することについて、具体的なお話を織り交ぜてお話しいただいた。本講演を受けて今後当市としては、防災リーダー、自主防災組織中心の避難所運営訓練と、市主催のイベントでの防災リーダーの活用に取り組んでいきたい。